

〔国際学術講演会〕

「内蒙古の持続可能な発展をめざして」

和田 武*

1999年7月16日、中国・内蒙古自治区から王和平、劉建新、馬瑞萍の3氏を迎え、国際学術講演会が開催された。報告テーマおよび報告者と通訳の略歴は以下の通りである。

1. 中国内蒙古における生態環境の改善 報告者：劉建新，通訳：馬瑞萍

2. 内蒙古における投資環境 報告者：王和平，通訳：馬瑞萍

劉建新：1978年中国東南大学土木工学部卒業，現在，内蒙古科技信息研究所研究室主任。副研究員。論文には『内蒙古自治区民族特需用品生産現状及今後発展意見』など。

王和平：1983年内蒙古大学中文学部卒，現在，内蒙古自治区対外開放協公室総合所・所長。経済師。論文には『内蒙古自治区開放帯同戦略規画和合年規画目標』など。

馬瑞萍：1987年中国内蒙古大学外国語学部日本語学科卒，現在，神戸市外国語大学大学院博士課程在学中（国際関係学専攻）

本誌に掲載するのは、当日の発表内容をもとに若干の修正が加えられたものである。なお、両テーマともそれぞれの講演者と通訳にあたった馬氏との共同制作とのことで、掲載報告は共著の形式になっている。以下に本講演会を開催するに至った経緯とその意義、および当日の議論を簡単に述べておきたい。

1979年以来、中国は「改革・開放」政策によって沿岸部を中心に飛躍的な経済発展を遂げてきたが、同時にそれは内蒙古のような内陸部との間に大きな格差を生み出し、工業化が進展した都市域を中心に大気汚染をはじめとするさまざまな公害や環境破壊がもたらされた。ちょうどこのような問題が顕在化してきた頃（1992年）にリオデジャネイロで開催された「国連環境開発会議（UNCED）」は、中国の政策に大きな影響を与えることになった。

この会議では開発と環境の統合による「持続可能な発展」が打ち出され、それに基づく21世紀の戦略や方針が「アジェンダ21」として採択された。ここに示された持続可能な発展戦略を中国も受け入れ、1994年には中国における「中国アジェンダ21」を発表したのである。現在では「中国アジェンダ21」は「中華人民共和国国民経済と社会発展の第9回5カ年計画2010年長期目標綱領」にも反映され、具体化されつつある。

中国のように急速な経済発展を遂げつつある地域での環境破壊とともに、20世紀の終盤になって地球規模の環境問題も顕在化してきた。地球環境問題は自然のバランス破壊を伴うものであるだけに、回復不可能な不可逆的变化に至る可能性があり、人類や生物に生存の危機を含む重大な影響をもたらすおそれがあるため、その防止は今日の最重要課題のひとつである。この地球環境問題の主因は、先進国のこれまでの大量生産・大量消費型の生産消費活動にあり、それを持続可能なものに転換することが21世紀の課題であるが、同時に世界人口の大半を占める途上国の今後の発展のあり方も、今後の地球環境破壊を防止する上できわめて重要な条件なのである。

このような状況を踏まえて、最近、内蒙古自治区においても公害や環境破壊を抑制しつつ国民生活の向上

* 立命館大学産業社会学部教授

を可能にする持続可能なあり方を模索しようとする動きが現れはじめている。その動きのひとつとして、内蒙古自治区の政府機関である科学技術委員会を中心に、これまでの発展のあり方を検討し「持続可能な経済発展」を目指す研究が開始されることになった。こうして1997年夏頃、内蒙古科学技術委員会から、その職員で神戸市外国語大学大学院に留学中の馬瑞萍氏を通じて、筆者らに「内蒙古の持続可能な発展に関する研究」への協力要請があった。日本や国際社会の取り組みを参考に、内蒙古の自然、社会、歴史の特徴を踏まえた持続可能な発展のあり方を探るために協力をしてほしいとのことであった。前述のように今後の中国の発展の方向が地球環境にとっても大きな影響をもたらすものであることから、前向きに検討をすることにした。

こうして先方の招聘により1998年8月に内蒙古自治区の首都・呼和浩特市にある科学技術委員会を訪問し、要請を受け入れて「内蒙古自治区における持続可能な経済発展に関する研究」を共同で開始することになった。中国側のメンバーは、内蒙古自治区科学技術委員会・副所長で内蒙古軟科学研究会・理事長の謝仲元教授を代表に、同委員会科学技術開発中心主任の劉岩氏、内蒙古自治区対外開放協成室総合所の王和平所長。内蒙古科技信息研究所研究室主任の劉建新氏、科学技術開発中心交流部部長の高遠洪氏、現在、神戸市外国語大学大学院博士課程在学中の馬瑞萍氏の5名、日本側は代表の筆者と神戸市外国語大学和田幸子教授の2名で発足した。なお、元・通産省工業技術院資源技術研究所（現・資源環境技術総合研究所）大気圏環境保全部長田森行男氏（現・日本品質保証機構技術顧問）らにも必要に応じて協力を願うことにした。

その後、1998・9年に日本側研究者による内蒙古自治区における2回の現地調査を実施した。今回は、内蒙古側研究者を日本に招聘し、自治体、企業、生協などの視察を行うとともに、本講演会を開催する運びとなったという次第である。

次に講演会について簡単にまとめと感想を述べておく。

講演内容は以下に掲載されているので、ここでは詳しくは触れないが、非常に具体的で実践的な報告であった。劉建新氏の講演では、内蒙古の厳しい自然環境と人間活動による環境破壊の現状を克服するための取り組みの状況、および今後の展望が語られ、王和平氏は内蒙古の環境保全対策の推進にとって外資導入の必要性とその条件を話された。

講演会の参加者は10名で決して多くはなかったが、議論は活発であった。中国政府や内蒙古自治区の基本方針については概ね肯定的な意見が多かったが、その実施方向をめぐってはいくつかの問題点の指摘がなされた。そのなかでも政策の実現方法を上意下達型の規制を中心とする中国方式に対して、住民や企業などが主体的に参加していく方式の導入の必要性が複数の参加者から強調された。環境保全は創意工夫の積み重ねなしに達成できるものでなく、現実社会での実践のなかから先駆的事例を生みだし、それを普及発展させる方法が重要な役割を果たすが、今後、中国においても環境教育や啓蒙活動を強化することによってそのような状況づくりを進めていくことが望まれる。とくに未来に向かって、環境保全を優先する価値観を社会に広めていくためにも、社会人だけでなく、学校での子どもたちに対する環境教育の充実は重要性を増すだろう。

また、持続可能な発展において重要な物質やエネルギーの効率的利用の概念を政策に組み込んでいくことや、内蒙古に豊富に存在するためどうしても依存しがちな石炭などの再生不能資源利用を抑制し、バイオマスや風力などの再生可能資源を積極的に活用する政策を促進する社会制度の整備などおも今後の課題となることが指摘された。国営企業の民営化や郷鎮企業のあり方についても議論がなされた。

参加者にははじめて内蒙古の話聞いた人もいて新しい知見に触れるいい機会であったと思われる。また、はじめて日本を訪れた二人の演者にとっても、新たな視点や意見に触れるよい機会ともなり、双方にとって有意義な講演会であった。

当日はちょうど祇園祭の宵山であったので、講演会終了後、鉾の立ち並ぶ四条界隈を散策することができた。講演者たちは思いがけず日本の伝統的な祭りや文化の一端を見る機会にも恵まれ、思い出に残る楽しい1日であったという感想を語ってくれた。